特別寄稿

田口弘康氏に乾杯

謝名堂昌信※

田口氏と最初に出合ったのは1970年オーストラリア国立大学基礎医学部でのことだった。当時，田口氏は医化学部門の大学院生（PhD候補生）で，私は物理生化学部門の研究員だった。田口氏は元々一貫してNADHやテトラヒドロ葉酸のような生理活性を有する含窒素複素環式化合物（ジヒドロ体）の合成に携わっており，当時も制癌剤の開発を目標に8-アザプリンの合成に取組んでいた。門外の私には合成経路の複雑さや独自性などを知る由もなかったが，氏は独自の合成経路を展開し，着実に研究を進めているようであった。事実，毎年度末に発行される学部の研究報告書には優れた研究成果と共に研究計画の着実な進展が報告されていた。私は1971年に帰国し，3年間の京都大学での勤務を経て1974年に京都女子大学・京都女子大学短期大学部（以後，京女と略する）に着任し，一方田口氏は最短の3年間でPhDを取得後アメリカに渡り，John Hopkins大学では皮膚癌の発生に関連した研究でDNAに紫外線を照射するとシトシン誘導体のジヒドロ体が生成することを突き止め，次いでHarvard大学では貝の毒（サキシトシン）のモデル化合物の合成に成功した。

その後1975年に私が田口氏に京女の教員募集への応募を勧めたことがタイミング的にビザの期限切れと重なったこともあって，結果的に同氏は翌年の4月に一般教育の「自然」担当の教員として赴任することになった。着任以来田口氏と私の間でくり返し話題になったのは大学教育のあり方，とりわけ教える側の望ましい姿勢についてであった。二人の共通認識は，要するに教える側は逆説的な意味での「専門馬鹿」を育てることに徹するべきだということだった。ここでいう「専門馬鹿」は磐石の基礎に根ざした専門知識を持った人に対する敬意的表現であって，そういう意味で勝れた多くの先人達の範に見るように，そういう人の見識は自らあらゆる分野に広がり得るものであり，そういう人こそ教育目標とすべき人物像だと考えたのである。田口氏は一般教育の授業の中で例えば「梅酒作り」のような身近な「ノーハウ」を取り上げ，滲透圧，エントロピー，イオン・共有結合，界面活性等の原理的・基礎的な事柄の説明に力点を置いており，私も食物学科の生化学実験を担当した当初から酵素反応の活性化エネルギーの測定など，家政学部の実験としては一般的でない内容をあえて組み込んだ。教えられる側に一体エントロピーとは？エネルギーとは？と考えさせることが重要であるからである。教育改革は教育する側に向けられるべきであって，改革の一環として現在実施されている「ゆとり教育」なるものを我々は当初から疑問視していた。因にOECDによる15才児を対象とする学習到達度国際調査によると，日本の数学的リテラシーは2000年では1位にランクされていたのが2003年には6位に下っている。ともあれ最近の大学における職業教育偏重が抗しがたい社会的趨勢であるにせよ，工夫によって「ノーハウ」の背後にある原理に目を向けさせることは絶対に必要且可能であるというのが我々の共通認識である。

京女には，新聞に「内紛」などと書き立てられた2年間に及ぶ理事会と教授会の抗争があり（H6～8），最終的には両者が歩み寄る形で終息したのであるが，田口氏はその過程で重大な役割を果した。紛争の起点は，理事会が浄土真宗本願寺派によって企画された「龍谷総合学園構想」に不参加を決めたことにあるが，それは詰まる所，理事長の選任に関わる寄附行為の変更に至る点で教授会でも問題となった。この問題で合同教授会（大学・短大の全教員で構成され，全学共通の問題を審議するための学長を議長とする教授会）が紛糾する中で，理事会が突如合同教授会の廃止と大・短の組織的分離を決めたため，それまで大・短の全教員が同一の大学教員資格基準によって審査・採用され，混然一体となって教育に当り，混然一体となって諸委員会を構成していた教育現場では委員会の機能停止などの混乱が起きた。理事会はそれを職務放棄と断じ，関係の教員に指示書，警告書，召喚状等を送り付けるところとなり，遂には裁判沙汰にまで発展した。合同教授会は既に不開催となっていたので，理事会側の攻勢に対抗するために教授会側は学長を除く全教員で構成する「教員会議」を自主的に発足させ，学

※本学名誉教授

部長を含む15名の議長団がその運営に当った。この教員会議を代表し，同議長団会議の議長を務めたのが田口氏だった。私は成り行き上終始この紛争の渦中にあって議長団にも加わったが，田口氏は議長団会議をバックに教員会議の先頭に立ち，リードした。それ故にこそ教員会議は最後までエネルギーを保持し，以て理事会と教授会を相互尊重に基づく過渡的な妥協に導いたのである。田口氏が果した役割は誠に多大であり，特筆に値するものである。かくして京女は3年間の協調的な過渡期を経て新しい体制への滑らかな移行を果したのである。思うに，二つの反発するエネルギーが最終的に脱皮のエネルギーに収束した背景には全教職員の京女人としての自覚があったに相違ない。

さて，田口氏も来年は定年を迎えるとのことですが，内心ほっとするところがあるのではないか。退職まで未だ少々間があるが，氏の定年退職とその後に乾杯！